

行列は、1100年にわたる京都の都としての風俗の変遷を描いており、以後、この行列は「時代祭」と呼ばれて今日まで続けられている。この記念祭と内国博は、京都の都としての歴史を再確認するとともに、近代京都としての出発を強く印象付ける事業となった。

時代祭は、京都市全域から組織される「平安講社」がその運営に当たり、元学区と呼ばれる自治組織の連合会が輪番制でこの祭りを担っている。京都御所から平安神宮に至る時代祭の巡行路は、京都の時代変遷絵巻を彩る行列の舞台となっている。市民はこの祭の運営を担うことによって、京都の歴史に想いをいたす特別な時間を過ごす。そして、岡崎の地の平安神宮は、京都の1100年の歴史のシンボルとして存在しているのである。

平安神宮は、伝統と進取の気風の地である岡崎にふさわしく、伝統を基盤に置いた新しい試みがなされる場として現在も活躍している。中でも、昭和25年に京都市と京都能楽会の共催で始まった^{たきぎのう}京都薪能は、平成21年(2009)の6月に60回目を迎え、初夏の京都の風物詩となっている。平安神宮の拝殿前に特設舞台を組み、^{いみだけ}四隅には斎竹を配し、夕闇が迫るころ、かがり火の炎が揺らめく中で夕闇に浮かび上がる社殿を背景に、幽玄の世界が繰り広げられる。

このように、伝統と歴史と近代への躍進の地である岡崎では、近代以降、伝統を基盤とした時代祭や京都薪能などの新しい活動が生まれ、既にそれ自体伝統として根付いている。これらの活動が、この地の象徴である平安神宮と一体となって、京都の風物詩として市民に受け入れられ、楽しみの一つとなっている。



写真2-98 京都薪能

(ウ) 文教地区としての白河(岡崎・吉田)



図2-62 文教施設

記念祭・内国博に引き続き、博覧会跡地には、シンボルとしての平安神宮を中心にして、美術館、工業館などの施設が残され、常設の展示場として利用された。その後、武徳殿(明治32年(1899))が開設されたほか、東宮御慶事に際して寄せられた寄付を利用し、学術の府を唱える京都市にふさわしい事業として動物園(明治36年)が整備され、商品陳列所、府立図書館(明治42年)等が建設された。大正期に入ると大正大礼(大正4年(1915))に伴い、岡崎で大典記念京都博覧会が開催され、第一勸業館や第二勸業館、商品陳列所などがその会場となった。そして、大礼に際して二条離宮内に建設された舞楽殿^{ぶがくてん}が移築され、京都市公会堂として整備された。また、昭和の大礼に際しては、後に記念として大礼記念京都美術館(現京都市美術館)(昭和8年(1933))が建設されるなど、岡崎は明治以降文教地区として着実に整備されていった。

この文教地区の整備は、京都が1100年にわたって培われた伝統と歴史の基盤の上に、新しい近代西洋文明を受け入れて実現されたものであり、岡崎の地はここから、新しい京都の産業や文化の拠点として、市民とともに新しい近代都市景観と、歴史を背景とした新たな文化芸術活動等をつむぎだしてきたのである。